

子どもと保育の情景 (21)

着実さとていねいさ

戸田雅美

幼稚園の三歳児の三月のこと。

保育室や園庭で遊んでいた子どもたちに、担任が集まるように声をかけた。実は、今日は修了式の練習が行われることになっていたのであった。しかし、修了式は、五歳児と四歳児が中心で行われることとなっており、三歳児の出番はそのほんの一部でしかないので、ちょうど三歳児の出番に合うように集まるということ、担任は声をかけたのだった。そんな事情だったので、「すぐにまた戻ってきて遊べるから、今日は、片づけをしないで集まろう」ということになった。

築山に、砂場の道具を運んできて遊んでいたゆみと

ゆいかは、「片づけなくていいんだよね」と言い合いながら、さっそく手を洗いに行こうとする。それを見て、近くを三輪車で通りかかったそうじろうが、「片づけなさいといけないんだよ」と二人を呼び止めると、ゆみとゆいかは、自信たっぷりに、「いいんだよ。だって先生が、『片づけなくてお集まり』って言うたもん」と言い返す。そうじろうは、「えっ、そうなの？」というような表情だったが、ほかの子どもたちの様子を見て納得したらしく、自分も乗っていた三輪車をその場で降りて、走って部屋に入っていく。

三歳児たちも、「片づけなくて集まる」といういつ

もとは違う形もわかって、それを伝え合って動くようになってきたのだろう。とはいえ、まだまだ三歳児。片づけをしよう子どもやそうじろうのように、「片づけをしないといけない」と伝えに行く子どもも何人かいた。

やっとほぼ全員が集まって、順番にトイレに行ったりしているときに、あゆが、けいすけに、「お山こわしちゃった」と繰り返し言い始める。何のことかと不思議に思っているとき、担任には、事の次第がわかっているらしい。

「そうね、あゆちゃんは、つづきをしたかったんだよね。けいすけ君が、間違ってお山壊しちゃったんだよね。でもね、ほし組さんの修了式の練習に行って戻ってきたら、けいすけ君、ちゃんと直してくれるって言ってたよね。先生は、今日は『片づけなくたっていいよ』って言ったんだけど、ほら、いつもは、集まるときに片づけるでしょう。それで、けいすけ君はいつも

みたいに、片づけるって思っちゃったんだよね。けいすけ君、あとでちゃんと、あゆちゃんのお山、直すんだよね」と、あゆとけいすけに話しかける。それを、周りに子どもたちも聞いている。聞いているうちに、私にも、どうやら事情が飲みこめてくる。周りの子どもたちにとっても同じだったらしく、初めは心配そうにあゆとけいすけの様子を見ていた子どもたちも、落ち着いた表情になってくる。

三歳児たちは修了式の練習に出かけ、間もなく戻ってくる。修了式の練習に参加した三歳児たちは、ほんの少しの参加だったにもかかわらず、いつもとは違った心地よい緊張感を味わったらしい。みな一様に、少し紅潮した笑顔だった。

そして、また遊ぼうということになった。先ほど片づけなくておいた元の遊びに戻る子どももいれば、少し気分が変わったのか、別の遊びを始める子どももいた。あゆは、あれほどこだわっていたのに、山のこと

は忘れたらしい。りりこに誘われるままに、三輪車に乗って園庭を走り回っていた。

しばらくすると、三輪車に乗っているあゆを、けいすけが捕まえて、三輪車から降ろそうとしている。あゆは嫌がって、けいすけの手を振りほどいて、三輪車に乗り続けるが、けいすけも、しつこくあゆを追いかけている。私は、先ほどのことを思い出し、もしかしたら山を壊したのは、あゆが好きであゆの関心を引きたかったからだろうかとも思った。

すると、担任が、嫌がっているあゆに、「ねえ、あゆちゃん、けいすけ君が、あゆちゃんに見せたいものがあるらしいよ。ちよつと行ってごらん」と声をかける。けいすけは、それを聞くとにこにこしながら、あゆを砂場に案内する。そこには、おおきな砂山ができていた。なるほど、けいすけはちゃんと約束を覚えていてあゆの山を直し、それをあゆに見せたかったのだ。

しかし今のあゆは、三輪車に夢中だったらしい。ま

た、けいすけが、あゆとの約束を守って砂山を直したということには思いあたらないらしく、すぐにも三輪車に戻ろうとする。そこで担任は「ほら、さつき、あゆちゃんの山を直すって約束したの、けいすけ君はちゃんと覚えていて、それで戻ってきてから、ずーっと、直していたんだよ。よかったね、あゆちゃん」とけいすけの思いを伝える。やっと、あゆは思い出したらしく、砂山を見るところれしそうに笑う。

その笑顔を見ると、けいすけは、「ね、あゆちゃん、こうやって……」と、山を手のひらででいねいたたく。あゆがじっと見ていると、あゆの手を取って砂の上に乗せ、「ほらね、やってみて」と、もう一度手のひらで砂山をたたいて固めてみせる。あゆもつられてたたき始めると、けいすけは「楽しいねえ」とあゆの顔をのぞき込む。

あゆは、本格的に砂山で遊びたくなったらしく、山にトンネルを掘ろうとする。それを見たけいすけは、



「たたいてからにしよう。丈夫にしてからね」と、またたたいて見せる。あゆも「そうだね」と言うように、けいすけと同じようにまたていねいに山を固め始め、同じ動きが楽しいというように、顔を見合わせて笑う。

三歳児の世界は、ふわふわとやわらかい。悲しいと思うとどうしようもなく悲しいのだが、何かのきっかけで気持ちが変わると、その新しいことに夢中になる

ことができる。思いがあっても、いやむしろ、思いがあればあるほど言葉にできないことも多いが、その反面、遊びを通して、同じ動きを通して、思いが通じ合う。それもまた、人

と人とのコミュニケーションにとって、大切な経験である。

三歳児という子どもたちは、保育者が一つひとつ着実に援助していけば、やりたかった思いを持続することも、友達に思いを伝えることもできるかもしれない。

たとえば、「あゆちゃんは、けいすけ君に、お山を直してもらいたいわって言ったじゃないの。忘れちゃったのかな」とか、「けいすけ君は、せっかくあゆちゃんとの約束を守ってお山を作ったのだから、『あゆちゃん、約束守って作ったから見に来てね』ってちゃんと言おうね」と促すこともできる。

しかし、三歳児らしいやわらかさの中で、思いが相手に届いたときの喜びの体験を大切にしていねいな援助する。こんな保育が基盤となつて、次の四歳児の生活につながっていくのだろう。着実な援助とていねいな援助、その違いを考えていきたい。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)